

2007 立山登山マラニック

(2007年8月25日)

ゼッケンNo. 1420 山猫@滋賀

はじめに

過去3年連続で参加している「立山登山マラニック」は絶対に外せない大会なので今年も申し込んだ。立山は3000mの山だけあってコースも厳しく、手抜きできない大会だ。昨年は1週間前、京都で飲み会をした際に食中毒に掛かったらしく、その影響が1週間後の立山前日から出て、大会当日スタートしたものの、前夜からの下痢が収まらず、「雄山神社前立社壇」手前からはほとんど走ることにも出来なくなり、称名エイドに制限時間ジャストで入るも、その先、下痢の心配をしながら進むことは不可能と判断し、リタイヤした。収容バスで室堂まで送ってもらった後、冬の豪雪で雪渓が至る所にある雄大なパノラマを眺めながら、雄山山頂まで登り、「雄山神社峰本社」でご祈祷をして頂き、下山した。

あれから1年、7月は九州へ出張し、それなりの練習を積むことはできたが、去年のことが頭を過ぎっての立山参戦となった。そして年々感じる体力、気力の衰えも気になる。情報では300名以上の方が申し込みされ、落選させた方も多くあったようだ。申し込みが多いということは人気があり、立山の雄大な大自然を一度は目にしたいと思う人が多いからだろう。

今年はダブルさんが初めて申し込まれることを聞き、やまさんともりけんさんの経験者も申込みされるので、高所恐怖症のタラさんにも是非参加しようと誘った。「立山の景色は絶対に百聞は一見にしかず、行かずしてわからない」と誘った結果、申し込みされた。すでに5月には5人分の宿泊予約をネット済ませていた。7月には5人全員が参加許可を得られたとの情報も入り、やっと安心できた。

昨年の失敗を繰り返すまいと気が引き締まる思いで出発日を待った。今年もし駄目だったら、もう本当に走れなくなるのではないかという不安も内心あった。今年の大会参加は「鯖街道」のBコースだけ。鯖は地元なのでいろいろな方々との出会いも少なかった。さくら道もひとりで走ったので、人との関わりもほとんどなかった。そういう意味で今年唯一、人との出会いを楽しめるのはこの立山登山マラニックだけだろうと思っていた。

前日

24日は代休を取り、今年も青春18切符を使って富山に向かうことにした。昨年10月から湖西線・北陸線の直流化に伴って湖西線経由で敦賀まで直接行けるようになったので、そのルートで行くことにした。9時過ぎの電車に乗って京都まで行き、そこから湖西線に乗り換えたが、姫路発だったので京都ではほぼ満席となっていた。湖西線は高架なので左に比叡、比良を、右に琵琶湖を眺めながら、敦賀に向かった。空は快晴、明日も暑くなりそう。湖西線の敦賀直通化によって、乗客は増えているようだ。今回、敦賀では27分しか乗り継ぎ時間がないため、元祖ソースかつ丼の店「ヨーロッパ軒・敦賀駅前店」に11時に電話し、持ち帰りを用意してもらうように頼んだ。



11時14分に敦賀に着いた。敦賀着の電車はホームの一番後ろ側に止まるが、改札を出るにはホーム一番前にある通路まで歩かなければならなく大変だ。ヨーロッパ軒に着くと既に弁当を用意してもらっていた。敦賀駅に戻るとちょうど良い時間になっていたの缶ビールを買って、今度は福井行

きの電車に乗る。この電車は空いていた。ソースカツ丼のご飯は押さえ込まれるほど目一杯でボリューム満点。車内から外の景色を眺めながら食べる弁当の味は格別だ。今夜眠りやすい様に睡眠薬を飲む。その後、車内で何回か眠りについた。福井駅で今度は富山行きに乗り換える。ここから富山までは3時間弱掛かる。缶ビールを飲みながら富山に向かったが、途中の小松や金沢で10分ほど止まるので長く感じた。

その間に2004年初めて参加した時に書いた“立山登山マラニック”の完走記を読んだ。長々と自分で書いたものながら、初参加にしては良く書けているなあ〜と自画自賛する。我ながら3年前のことは途切れ途切れで部分的にしか覚えていないが、こうやって完走記があると当時を振り返ることができ、事実に基づいた記録の大切さを痛感する。

15時38分、富山駅に到着、隣の「地鉄ホテル」へ受付に行く。お馴染みのスタッフばかりだ。受付すると7月出張中でゼッケン受付場所の返信ハガキを送っていなかったため、浜黒崎に私のゼッケンはあるとのこと。明日朝、受付すれば良いので仕方ないことだと諦める。「浜黒崎のスタッフに連絡して、届けることが可能なら連絡します」との返事をもらった。立山のゼッケンはすべて永久欠番なので、今回は前回最後のゼッケン番号の次の数字から始まっている。16時過ぎのサンダーバードでダブルさん、タラさん、やまさん、もりけんさんも到着。うえちゃんも顔を出される。タラさんがM本さんに電話されたので、優しい声を聞くことができた。「明日は暑くなるので覚悟して下さいよ。応援に行きますから」と話された。いつも心優しいM本さんには恐縮し、明日お会いするのが楽しみだ。



その後、宿泊する「ホテル・コーホー」へ5人で向かう。今年で3回目だが、外観の割に内装は美しい3680円の格安ホテルだ。スタッフから連絡があり、ゼッケンが受付に届いたとのこと。ゼッケンを受け取りに地鉄ホテルへ向かう。そこでがつつくんも合流、一緒に夕食を食べに行く。昨年のももあり、生物はできるだけ避けたかったので「白木屋」に行くことになった。白木屋ではご飯、焼きおにぎり、ハマチのたたき、卵焼き、サラダなどを食べた。枸杞さんからは出席できないので、缶ビール片手の画像メールが送られて来た。18時半過ぎに店を出て、明日朝の朝食をコンビニで買う。今年は安心して弁当が買えた。19時頃にホテルに戻り、風呂に入り、明日の用意をして、再度、睡眠薬を飲んで20時半頃に横になる。しかし、なかなか寝付かれず、眠りについたのは22時前だったと思う。

当日朝

1時30分、目覚ましは鳴るより早く目が覚めた。弁当をホテル内の電子レンジで温める。2時半にホテル出発なので朝食後は少し横になる。便の排出を済ませると身体も軽くなったが、また去年のことが頭を過ぎった。走れる姿で2時半に5人でホテルを出て、富山駅前行くと浜黒崎行きの観光バスが止まっていた。横には屋台ラーメンがあった。毎年目にする光景だ。早く出発するバスに乗り込むと2時50分くらいに出発し、浜黒崎キャンプ場に向かった。約30分弱で到着。まだランナー達は少なかった。懐中電灯が用意されているか気になっていたが、例年通り用意して下さっていたので1本借りる。

今回、上下着はDeSotoノースリーブバイクウェアとランパン、シューズはサッカニーのアズラ、ソックスは作業着店で売っているような安物、給水用に保冷ボトルを用意した。ポーチに持参したのはカメラ、お金1700円ほど、キズテープ、食塩、エビオス、ティッシュ、汗拭きに欠かせない小タオルだけだった。最近ケアのために何を塗っても、付けても関係なくなっただのが実態だ。





そうこうしていると福光のH多
パパ&ママ、枸杞さんが早朝より
激励に来て下さった。H多パパ&
ママは福光から1時間で来られた
とおっしゃっていたが、我々と同じ
くらいの時間に起きて、わざわざ
来て下さったかと思うと本当に頭
が下がる。思えば3人とも出会いは
さくら道から始まっていた。た



かがランナーのためにと行ってしまえば簡単だが、このように来てもらえることへの感謝、気薄になる現在社会においてもウルトラランナーの心はいつまでも熱いことを実感した。97年秋田以来になる仙台のマックス爺さんとも再会。向こうから声を掛けてもらったので良かったが、私の方からではわからなかったと思う。63歳とは思えないほど若々しくてお元気だった。また仙台の香峰さんは急遽参加出来なくな



ったが、ご主人とは挨拶できた。フランケンさん、大阪のH間さん、神奈川のM田さん、クニさん、N谷さんと視覚障害者のK村さん。思わずK村さんには開口一番「マッサージして欲しいですね」が出てしまった。去年体調不良で申し込まれながら参加できなかった babi さんとも再会。これから3003mを登るというのに、緊張感もなく和気藹々な雰囲気だった。

海拔0mの感触を掴むために砂浜で海水に手を触れる。間もなくスタートだ。今年は10回目の記念大会。10回連続参加者の方が松明を持って先導されるとのこと。フランケンさんもそのひとりだ。「松明の先導される方をどこどこまでは絶対に抜かさないように」との指示があった。スタート1分前に松原実行委員長が簡単な挨拶をされ、「エイ、エイ、オー」の掛け声の後、一斉にスタートした。



大会道中

今年は4時ジャストのスタートだった。キャンプ場内の歩道を通り、キャンプ場前の道路を横断、常願寺川西側の堤防を進む。先導の方が持たれた松明の火が所々に落ちていた。砂利道に変わり、走り難くなるが、今回履いたサッカニーのアズラはほとんど違和感がなかった。この時点で知っている人が周りにはいなかった。私はできるだけペースを乱さないように進んだ。予想最低気温は24℃になっていたが、この4年間では一番低く感じた。堤防に入ってから少し風を感じるようになった。この時期5時頃の湿度は90%くらいが平均だが、この日10%は低いように思えた。これは有り難い。ダブルさんが横を抜かして行かれた。5km付近だろうか、雄峰大橋を過ぎた頃にbabiさんに追いつかれ、その後かなり長い間世間話をしながら並走する。すでに国際資格を取られたbabiさんには遅いペースだったと思う。昨年参加されなかったので、昨年の大会のこともいろいろ話した。1ヶ所、昨年までは砂利道だった川底を横断して堤防の上になるところから、今年は舗装された道路に変わっていた。ここは結構長い砂利道だっただけに走るにはかなり楽になって助かった。このように常願寺川沿いの堤防は一旦下って、また堤防の坂を上らないといけない所が数回ある。走りながら、喉が渇かないように保冷ボトルに入れた冷たいスポーツドリンクを適度に口にした。

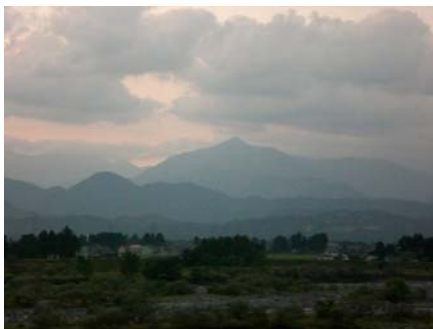
富山地鉄の踏切(7.4km/04:47)を渡り、やや左斜めに進んで堤防に出ると一旦砂利道は終わった。例年に比べ、ランナーの姿がまばらだ。いつもよりもかなりバラバラだと感じた。babiさんも「ペースが速いのでは・・・」と言われていた。しかし、キロ6分少しのペースなので速いことはない。初参加者が多いので自然とそのような流れになってしまっているのかもしれない。

1時間経つと東の空が少し赤くなり始めていた。その頃にはウエアは汗びっしょりになっていた。しかし、今年は走りに余裕があった。「大日橋」では水のエイドがあり、2杯頂いた。ここはスタッフの方々の応援が多いところだ。ここで昨年女子トップのO沢さんと後半に強いアメンボさんの応援を受けた。



アメンボさんはトランス蝦夷を走られていたそう。スタートから1時間少しした頃にタラさんが追いつかれた。ほんの少し3人で並走した後、私は写真を撮り始めたので遅れる。

北陸自動車道高架下を潜ると常願寺川が2つに別れており、右は用水路ようになる。用水を渡って少しするとまた砂利道となった。5時20分、だいぶ東の空は赤みを帯びて明るくなり始めた。その中央に

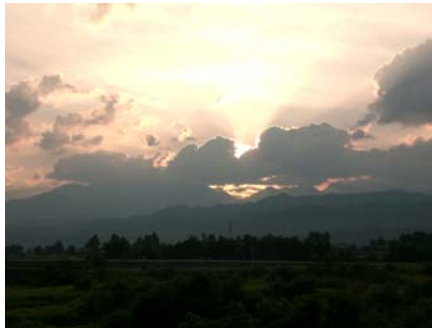


先が尖った山が見える。何という山か気になった。タラさんとbabiさんに迫るも、写真を撮る度に差は開いた。いつもはそろそろ苦しくなる頃なのに、今年は余裕を持って走れた。しかし、すでにシューズ内には汗が流れ始めている。この頃、湖北のN部さんに抜かれた。N部さんの走りは足を置きに

行くロスのないウルトラ走りだった。

富山霊園付近からは真っ直ぐな舗装の堤防が続く。タラさん、babiさんの姿が遠のく。若干ペースダウンしていると思うが、それほど苦しくないで、自分でもビックリするほどの余裕だ。むしろ、何故苦しくないのか不思議に思えた。おそらくbabiさんと長く走った際、リラックスしていたのではないだろうか？。雷鳥大橋に差し掛かる手前で大きな声で「頑張れ、頑張れ！」と応援して下さる女性の姿があったが、頑張れは辛く感じる言葉だ。東の山々の稜線から太陽が顔を出し始めた。かなり暑くなる予感がする日の出だった。

その先の「雷鳥大橋」(16.8km/05:49)で常願寺川を渡り、東岸に出る。あと2kmでエイ



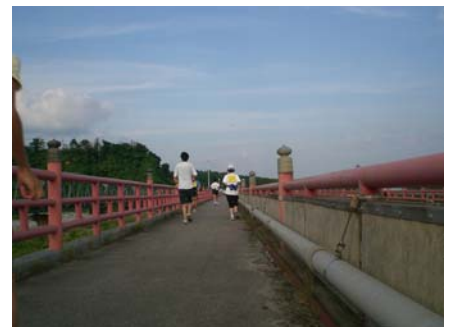
ドとの表示があり、前に鳥居が見えて来た。雷鳥大橋の真ん中辺りで東の空は雲の合間から後光が差しして綺麗な光景だったのでタイミングを見計らってシャッターを何回か切った。逆光なので、逆光設定しながらの撮影だった。結構、良い写真が撮れたように思えた。橋を渡り切ると左側の歩道を走った。過去2年は完全に歩いてきたところだ。かなりやばくなってはきているが、何とか走れていた。立山橋を渡った先にある自販機で水分供給しないといけないのでスポーツドリンクは全て飲んでボトルは空にした。



県道を横断し、地鉄の踏切を越えると『雄山神社前立社壇』前エイド(19.3km/06:04)に到着。県道付近にはたくさんの応援があった。パン、チョコ、バナナ、水を頂き、早急に先へ進む。今年は歩いていない分、若干到着時間が早い。北側に位置する地鉄と並行に走る「立山橋」を渡っている最中に吐き気を催し、戻してしまう。朝食べた物は少し出た程度なので、スタミナには影響ないだろう。橋を渡った先にあるコカコーラの自販機でアンバササワーホワイトを買い、ボトルに入れる。今度は常願寺川の西側を進むことになる。ここからは急な上りが待ち構えている。まだ20km、歩いている人はいないので私も負けまいと今年は走って上った。その後、緩い上りになるが、ここで疲れ果て歩き出す。上りが終わるとまた走り出せた。走れるところが去年と違うところだ。田園地帯をみんな淡々と走っている。まだ6時半頃、そんなには暑くない。

平坦の後、緩い上りがあるが、ここは歩いた。上りを終えたところで私設エイドを発見、有り難い。梨2切れとパイナップル1切れ、水を頂く。ここからはやや長い下りになる。左側の溝蓋に上がって写真を撮る。いつも写真を撮るポイントで常願寺川とその向こうにある田園地帯、集落、山々が一望できる最初のポイントだ。ペースを上げて下った後に岡田集落が見えてきた。ダイドーの自販機があったが、今回は冷えたボトルがあるのでパスした。また緩い下りがあり、橋を渡ると左側が開け、すぐ横が常願寺川のせせらぎだ。倉庫のような建物の横にダイドーの自販機があるのを知っているので、立ち寄って缶コーヒーを飲む。その先、緩い上りに差し掛かると歩いた。

わずかな松木の集落に入ったところで昨年同様に旧家のような立派な民家を探したが、見つからなかった。そのすぐ先の牧集落に差し掛かると民家の前にシャワーが見えてきた。これは過去にはなかったことだが、何方かがシャワーを設置してくれていたようだ。少しシャワーを浴び、その先にある冷水を口にし、顔を洗う。東京のN原さんが



前を走られていた。ネイチャーランや萩往還を連ちゃんされる方とは思えないゆっくりした走りだった。この先でまた下りの大きなカーブがあった。去年はE角さんと出合って少し話をした辺りだ。今年もE角さんは参加されていた。途中で道端の湧き水でまた顔を洗う。小口川の橋を渡った先で個人用のエイドらしきものがあったが、悪くて近寄ることはしなかった。前後にはランナーの姿も多い。両側木立の中を緩く上ると再び常願寺川が見え始めた。この辺りの河原は大きな石が多いようだ。



矢印に指示に従って、右に進むと今度は和田集落があった。車が飛ばして前方から来たので驚く。ここは旧街道のような雰囲気があるところだ。軒先から湧き水の出ている民家があったので、屈んで頭から水を被り、身体にも水を掛ける。和田川を渡ったところにある**小見T字路エイド（30.1km／07:17）**は生温い給水なので、パスさせてもらった。その先には短い急坂があり、上り切ると常願寺川に掛かる「芳見橋」がある。ここの歩道は狭い。この橋から見る常願寺川は上流と下流の雰囲気が違う。上流は堰が幾つか見え、大きな石がゴロゴロ転がり、下流は堰もなく、向こうには地獄の陸橋が見える。



信号のあるT字路の右角にあるガソリンスタンドに入り、ジンジャエールを飲む。ガソリンスタンドを出ると長い上りが待ち構えているが、ここからの陽射しは強烈だった。常願寺川の西側は木立もあり、強烈な暑さではなかったが、東側に出ると照り返しがきつく、車も多い。特に観光バスが多くなる。それに輪を掛けたように歩道がなく、路肩も狭い。他のランナー達は走って上って行くが、私にはそんな余力、パワーがなかった。いつも通り、うなだれながらひたすら必死で歩く。そして、芦峠の集落に近づく。



『雄山神社中宮祈願殿』手前では自販機に寄り、ダイドーのM I Uを買い、ボトルに移し替える。M I Uはレモン味のする方のミネラルを買ってしまった。すぐ先でエイドを開いて下さっていたので、冷たい水を頂いた。雄山神社中宮祈願殿の横には山をもじった「立山博物館」がある。さらにその先には石垣にコケの生えた山寺のような山門のお寺がある。落ち着いた雰囲気のお寺だ。今年はこれを見ないままに通り過ぎた。焦りがあったのだろう。去年のことがあったので、先を急ごう、急ごうとする気持ちが強く出たようだ。するとまた急に吐き気を催し、先ほど飲んだ水を全部戻した。

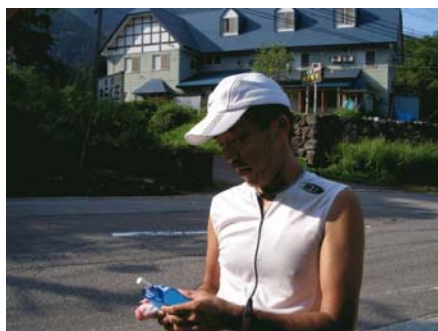
少し行くと緩い下りになり、右側は歩道があるが、そのまま左端を進む。もうひとり男性ランナーも湧き水目当てに左側を走られていた。左側の湧き水で頭を冷やし、顔を洗うと何と気持ち良いか。頭が冷えると元気になる。道路を横断して歩道に戻るとスタッフの方から「やまねこさん、頑張っ！」と声を掛けられた。今年はスタッフの数が少ないようだ。大きなT字路を右折し、この先4km行けば立山駅、そこからさらに7km進むと称名エイド。ここを真っ直ぐに行けば、称名滝方面にショートカットできる。

「立山大橋」入口（33.6km／07:47）通過。眼下の常願寺川を見ながら、「立山大橋」を渡る。ここではいつも写真を撮ることにしている。橋の上は走ろうと決めていたので、真ん中辺りまで来ると軽



自動車の横に女性の姿があった。枸杞さんだった。スタート前に浜黒崎でお会いした時、「また後で」とおっしゃられたが、サポートして下さっていたのだ。「何か飲み物でも？」と聞かれ、遠慮なくコーラを頂いた。写真も撮ってもらえた。橋の上を走り切ると厳しい上りがある。ここは陽を遮るものがなく、非常に暑く、苦しいところだ。先ほど自販機で買った冷たいM I Uを口にする。飲み過ぎるとまた戻す可能性があるので少しずつ飲む。

「立山国際ホテル」まで来るとようやく上りが終わり、少しの間下りになる。右側には「極楽坂スキー場」の緑のゲレンデが見えた。歩道は終わり、狭い路肩を進む。上り終えてからも、体温上昇で走れない状況が続き、かなりグロッキー状態に陥っていた。そんな時だ。左



側の広場で枸杞さんの姿があり、凍ったアクエリオスパックを渡して下さった。頭を、顔を、足を冷やすと蘇るような気分になった。オレンジも頂いて、先に進む。本当に有り難かった。一番苦しいところで、枸杞さんは天女のような存在だった。歩いて進むと前にスタッフの姿が数名、応援者が10人ほど見えて来た。右は「雷鳥バレースキー場」のゲレンデだ。このT字路で左折すると下りがある。スタッフに「左折して2km行けばエイドです」と教えてもらう。



左折してからは右に歩道があるので、そこを進む。そのまま進むと歩道と車道とに別れ、歩道のみ道路の上を通る形になる。ここからは下りだ。去年のことを思い出した。下痢の兆候が止まらず、尻を押さえながら必死で走って下った。歩道と車道との合流地点に達してから、今度は歩道を逆走し、



脇に屈んで便をしたのだった。あの時は神聖な立山を汚した気持ちより、我が身のことで必死だった。1年前、こんなこともあったと複雑な気持ちを持って通過する。その後も快調に下れ、平坦になったところで「真川大橋」が見えた。左には地鉄の線路が見える。間もなく立山駅エイドだ。橋を渡ってから、公衆トイレに行き、手を洗おうとすると洗面は小さな虫が黒くなるほど付着していて、気持ち悪かった。

地鉄の踏切を渡ると『立山駅』エイド(37.9km/08:23)に到着。パンやおにぎりは喉が通らないので、梨2切れとチョコレートを頂いた。水も生温いのでパスして、隣の自販機でリアルゴールドを飲む。ボトルの中はまだM I Uが十分に入っていた。さすがに観光地、車の数も多く、天気も良いので立山駅前には向かう人の姿が数多くあった。



人目もあるのでエイドを出てからは走り始める。称名川に掛かる橋を渡り、清涼感いっぱいに滝のように流れる堰を見ながら進む。称名川はこのすぐ下流で常願寺川に合流する。しばらく走ってから、その後は歩きの世界に入る。同じくらいに橋を渡られたロングタイトの女性は歩かずに走り続けられていた。称名川の対岸は乗用車がいっぱい止まっていた。おそらく室堂方面に行かれる方が駐車されているのだろうと察する。太陽の光を帯びた緑の木々に堰を落ちる滝のような称名川の水流は本当によくマッチしていると思う。緩いがずっと上っている。後から来るランナーがどんどん追いついて、抜かして行く。結構みんな走っている。「クムジュン」というログハウスのレストラン前ではテントの下で男の子が冷たい水のエイドを今年も出してくれていた。毎年のことだが、有り難い。大きなコップに2杯頂いた。「毎年ありがとう」と御礼を言って先に進んだ。会話はなくても子供達のエイドしてくれている気持ちはランナーの元気になると思う。ここで一度下りがあるので、そこだけは走った。



称名川対岸の遙か上を眺めるとヘアピンカーブを蛇行しながら上って行く立山有料道路が見える。凄い高さ、凄いカーブと上りだ。この光景を見ると立山登山マラニックの凄さがわかる。容赦なく照りつける太陽を背に前へ前へと進むしかない。ここからは歩いて走ってもあまり変わらない。そして、その先に立山有料道路ゲートが見えて来た。その左側には店があり、豊富な湧き水が出ている。これが冷たくて気持ち良いのだ。頭、顔、手足に掛け、たっぷり飲んだ。ボトルの水が減っていたので、ボトル一杯に冷水を入れる。これで八郎坂から弘法までの給水は持つだろう。暑いので食塩を舐めて、塩分補給する。3回目くらいだ。エビオスも飲む。

『ようこそ雲上の立山へ』と書かれた「立山有料道路のゲート」(41.8km/9:04)は「桂台」にあり、標高663mの表示があった。立山駅から4kmで200m上っていた。ここから称名エイドまでは後3km弱。30分あまり歩けば着くことができるだろう。

『ようこそ雲上の立山へ』と書かれた「立山有料道路のゲート」(41.8km/9:04)は「桂台」にあり、標高663mの表示があった。立山駅から4kmで200m上っていた。ここから称名エイドまでは後3km弱。30分あまり歩けば着くことができるだろう。



しかし、ここからは強烈な上り坂がある。一端下った後、上り変わった。できるだけ影を求めて、山側にあたる道路左側を走ることが多かった。先ほど水を被ったばかりだが、また工事現場のところで冷水が湧いているので飲んだ。暑さでいくら飲んでも飲み足りないような気分になる。称名滝を目指す観光バスが横を通り過ぎて行く。前にも



後にもランナーの姿が数多くあり、前に出たり、下がったりを繰り返す。右前方に「悪城の壁」が見え始めた。高さ300m、幅2kmにわたる一枚岩だ。太陽の光が当たり、やや逆光気味で見辛かった。

この頃、また私設エイドがあり、氷の入った冷水を出して下さっていた。氷がもったいないので、ボトルの水がさらに冷えるようにボトルに入れた。氷が大きくて、入りにくく手こずった。坂はさらに厳しくなり、13%の坂は洞門から始まって、2つ目の洞門先までである。膝に手を置きながら、歩きたい気分になる坂道だ。まさに舗装の山登りだ。称名滝の駐車場案内が見え始め、左右に幾つかの駐車場が見えるとその先に称名エイドはある。今年はバスの数がかなり少ないように感じた。ゼッケン番号が読み上げられ、「やまねこさん、頑張ってください！」と女性の大きな声が聞こえてきた。



『称名レストハウス』エイド(44.7km/09:36)に到着。リタイヤした昨年より1時間早い。これで何とかゴールが少し見えて来たという心境だった。若い女の子に冷えたタオルを渡してもらったので顔、手を拭く。本当に気持ち良い。ゆっくりしていたい気分になる。エイドではそうめん、梨4切れ、チョコレート、冷たい水を頂く。称名エイドは1000mくらいの標高だが、日差しは太陽に近い分、強く感じた。そうめんは影に入って食べる。エイドのアイスボックスに氷がたくさん入っていたので、幾らかもらってボトルに入れる。これで八郎坂は万全だ。6分後くらいに出発する。称名滝方面に向かうとエイドに入る時、あんなにたくさんいたランナー達は誰もいなくなっていた。先に行った人、ゆっくり休んでいる人などがあるのだ



ろうが、みんなゆっくりしているように思えた。

すぐ先の湧き水で顔を洗い、身体に掛け、少し口にして八郎坂を目指す。ここから称名滝までも結構上っていた。道路の脇に設けられた歩道を通って八郎坂を目指す。例年は多くの観光客を抜き、またすれ違おうが、今年は数人としか会わなかった。真っ直ぐに進めば「称名滝」、右に行けば「八郎坂」だ。左側には「大日岳登山口」の表示があった。称名川に掛かる「飛竜橋」を渡り、称名川を見渡すと川底は人



工の石置になっていた。川底が削られない様になっているのだろう。『八郎坂』と刻まれた石碑の前を通過して、登山道へと進む。八郎坂は別名「称名坂」ともいうそう。これで3回目、距離感は掴んでいるが、「どこでどんな感じになっているか」の記憶はない。弘法の

立山有料道路まで2.4kmだけはわかっていた。



木々の中、足元の悪い登山道を登って行く。2人のランナーが前にいたが、かなり苦しそうで軽々と抜かして行く。それでもセーブしているつもりだ。前半はそれほどきついと思えるほどでもなかった。スタート前の説明では危険箇所が8カ所ほどあり、ロープを張っていると聞いたが、前半にそういうところはなかった。まずひとつ目の展望台1270mで落差350mの『称名滝』の写真を撮る。登山道脇に



はところどころで飛竜橋と弘法までの距離が書かれている。上から降りて来られる登山者の姿もあった。油断すると下は濡れているので滑る。慎重に、慎重に登って行く。中間くらいまで来た頃から、足元の岩が大きくなり、滑りやすく、登りにくい地形に変わってきた。登山口から弘法までは1時間くらいなので、距離的には半分過ぎていても、時間的には半分来ていない。風通しの良いところに出ると気持ち良い風が吹いていた。今年もそんなに蒸し暑くは感じなかった。それでも夏の登山、汗の量はかなり多い。ボトルの冷水は弥陀ヶ原まで保たさないといけないので、小刻みに少しずつ補給する。木立の合間から見える称名滝を見ながら、撮影ポイントの3カ所ではきっちり写真を撮った。この登山道は至るところに樹木の名前を紹介する看板が立っている。



後半は長く感じ、休む回数も増えた。危険箇所は後半に集中しており、足も疲れているので十分に気を使つての前進だった。ここから足を滑らせたら、イチコロだ。岩をよじ登らないといけないようなところも後半は多かった。前にランナーが見えてきたが、かなり苦しそうだった。私の太股や脹ら



脛もかなり疲れ、パンパンになっていた。上げる足も重たい。2ヶ所目の展望台1410mではベンチに座り込む。その後、途中でスタッフが待機、「お疲れ様です」と言って進む。もう2/3くらい過ぎたと思う。尾根のような感じのやや平坦に近いところがあり、そこを越えると残り少ない。その先もきつい登りは続いた。またスタッフの姿があり、「もう少しです」と教えて下さった。車の音が聞こえれば、立山有料道路は近い。そして、ついに車の音がして登山道は終わりを告げた。登り終え、少し進むとベンチがあるのでひと休み。そして、立山有料道路に合流した。八郎坂の上りは2.4kmで標高差500mある。時計を見ると55分掛かっていた。ここの標高は1580mだ。合流地点でスタッフから「あと400mでエイドです」と声を掛けてもらう。上からは容赦なく、太陽の強い光が照りつけていた。



『弘法』エイド(47.1km/10:50)では段ボールに座り込んでゼリー2コ、梨3切れ、水を

頂いた。エイドを後にするとこの辺りはまだまだ暑いところだが、今年は過去にも増して日当たりが強く感じる。冷えた山独特の風も吹いてこない。この先、スタッフの誘導で立山有料道路右の草原にある木道を進むことになる。上り中心ながら、下りもあり、上りは階段になっているところもある。弘法から2.



5 km先の「追分」までは木道が続く。木道は白色のゴザのような板だが、上りの場合、段が1枚1枚上がっているの走り辛い、下っている場合は走りやすい。平坦は歩くには丁度良いくらいだ。ただ、湿気がやや高いので暑い。時々、追分までの距離表示があっ

た。木道では脇にある白のベンチに腰掛けて休むことが多かったの、後ろからのランナーにどんどん抜かれた。木道は立山有料道路に3、4回出てはまた離れて中の草原に入る、これを繰り返した。



追分までの2.5 kmを終えると立山有料道路に合流。スタッフにエイドまで500mと教えてもら

う。何も目印がないので、どこが追分なので良くわからなかった。目の前に立山有料道路の料金所ゲートが見え、この先をSの字に大きく右カーブ、左カーブして直線を進むと「弥陀ヶ原」エイドがある。かなりきつくなってきた。ここのエイドは細く切ったキュウリが名物だ。キュウリ、チョコレートを頂いて、先を急ぐ。前よりエイドの位置が遠くになったような気がしたが、これは気のせいかもしれない。いつもなら、この辺りからガスが出てやや肌寒くなる頃だが、今年は一向にガスって来ないどころか、直射日光で涼しくな

って来ない。
「弥陀ヶ原ホテル前」(52.7 km / 11:37)で通過。標高1930mだが、暑いのでボトルの冷水も底をついていた。茶色の建物の弥陀ヶ原バス停に入る。中には立山散策の中高年の方が8人ほどバス



を待たれていた。冷えた爽健美茶を買ってボトルに入れ、水道の水も飲んだ。無茶苦茶冷たい。頭に、手に、足に冷水を掛けると甦る気がした。手に水を流すと冷た過ぎて痛いくらいだ。スーパー銭湯の水風呂は17℃くらいだが、おそらく13、14℃の水温だと思う。

ここから室堂までは約8 km、標高520m上らないといけない。弘法からずっと上ってきたので、苦しみは続いた。今まで通り歩き通す予定だが、過去はガスで寒さを感じながら上った立山有料道路も、今年は強い陽差しで体力が奪われ、歩くことさえままならぬ状況だ。ヘアピンカーブが続くので、できるだけインを歩こうと左に、右にコースを変えていると対向してき

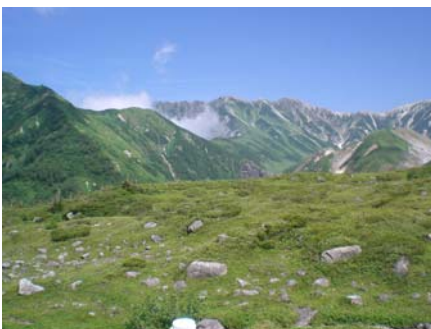
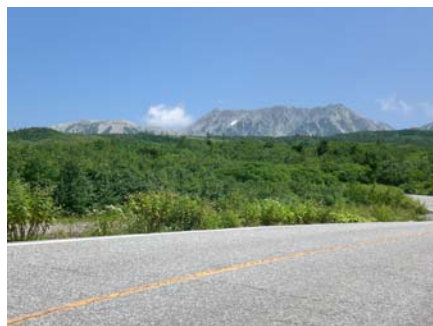


たスタッフの車から、「左側を進んで下さい」と注意を受けた。そのうち疲れて、影になっている右道路脇の路肩に座り込んで休んだ。M田さんからは「休み過ぎですよ」と言われてしまった。M田さんは一昨年、J定さんとH科さんの伴走をされた方だが、この日は足の具合が悪かったようでずっと歩かれていた。一



旦、座り込むとこのままずっと座っていたい気分になってしまうが、早目に切り上げて、先を急ぐようにした。暑いので、冷えた爽健美茶を何度も飲む。過去はこの付近でこんなに多くの水分を補給することはなかった。

「美松坂」(2030m)を過ぎる。左は一面草原になっている。スタッフに注意されたが、疲れから、ヘアピンカーブではできるだけイン、インの最短距離を進むようにした。遠くには雄山がはっきりと見える。立山有料道路で乗客を運ぶ高原バスは4、5分おきくらいに次から次と来るが、中には窓から手を振って応援してくれる観光客もいた。向こうが手を振ってくれたら、こちらでも疲れた表情で手を振る。過去、左にある草原の向こうはガスで何も見えなかったが、今年は「大日連山」もはっきり見えた。そして、草原の向こうには真っ青な空の下、立山がはっきりと半分くらい顔を出している。素晴らしい景色に疲れも忘れてうっとりする。



「鏡石」(2230m)まで進むと室堂まで4kmを切っている。鏡石の表示は見たが、標高は木が生い茂り隠れてしまっていて、見えなかった。丸い「鏡石」は緑の木々の中から半分ほど顔を出していた。写真を撮ったり、座り込んで休んだりするので、後続のランナーにどんどん抜かれる。上りが続くことで、かなり腰が痛くなってきた。今回履いているサッカニーのシューズは内にカーブしているので、両側小指の先が当たり、かなり痛かった。それが更に歩きにくくしていることもあった。室堂が近づくに従って、身体が動か



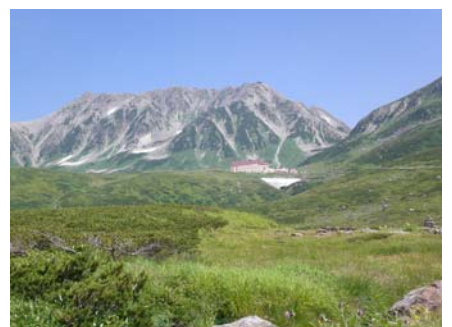
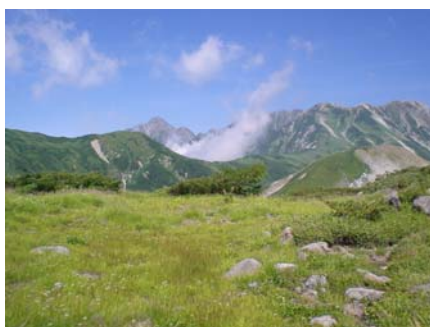
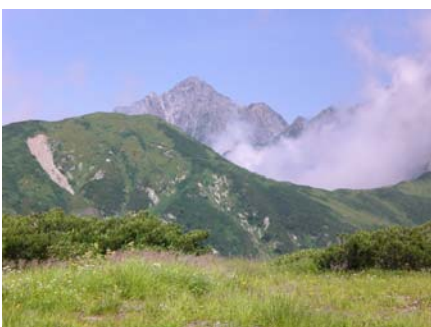
なくなり、歩きも苦しくなっていた。太股が前に出ない。これが普通なのか、それとも気圧が下がり、空気が薄くなってきたためなのかはわからなくなっていた。この素晴らしいロケーションのこともこの時は頭から外れていた。雄山にも、室堂にも確実に近づいていることはわかる。しかし、室堂は遠い。弥陀ヶ原で入れた爽健美茶は暑さでほとんどなくなっていた。



「ソーメン滝」(2270m) 辺りからは室堂までの道のりが、はっきりと見える。ソーメン滝は地獄谷から流れた硫黄の混じった水だ。直線なら1kmもないのに、ぐるっ〜と迂回しないといけない。

一步一步は重い、元気付けられた。その先で間もなく「天狗平」(2300m) の天狗平山荘前を通過。室堂までの距離は2.1kmだ。一時と違って前後にランナーの数がどんどん増えてきた。左前方には登山する者なら誰もが憧れる岩の殿堂「劔岳」が“ヌー”と顔を出していた。感激だった。劔岳がはっきりと見えた。このこと自体、すごい感動だった。ランナー達も足を止めて、デジカメで、携帯で写真を撮っていた。

室堂が近づき、みんな元気になって来たのだろう。反して、私の太股はかなり張り、足は更に重くなっていた。腰も痛い、ここまで来たからには頑張らなくては。徐々にホテル立山の姿が大きくなり始め、





エイドのテントも見えて来た。エイドの少し前にスタッフの姿があり、「やまねこさん、間もなくエイドです」と声を掛けてもらう。「ありがとうございます」と言って、エイドに入る。

標高2450mの『室堂バスターミナル』エイド(59.5km/13:14)に到着。どこのエイドでも、スタッフは「やまねこさん」と名前を呼んで迎えてくれるのが嬉しい。ここまで来ればとりあえずひと安心。弘法からは時間が掛かったが、関門まで46分の余裕があった。実行委員長の松原さんが「お疲れ様」と迎えて下さった。「今年は辿り着けました」と言う。エイドには10人ほどのランナーがいた。椅子に座らせてもらい、塩昆布、梅干し入りにお粥を頂き、お代わりする。この先、まだ550m登らないといけないので、そのエネルギーには最適だ。チョコレート、水も頂く。ボトルの水がなくなったので、満杯にしてもらった。真っ青な青空の下、緑の室堂平の先には雄大な立山連峰が目の前に迫っている。今年は最高の天気だ。



昨年は至る所で見えた雪渓も今年はだいぶ少なくなっていた。今年の室堂は今までと比べてもかなり人が多いように思えた。石畳を一の越に向かうが、今年の雄山一帯はいつもより黄緑色に近いように見え、室堂平の緑も一段と映えているように感じた。天気のせい



か、いつもより明るさが目立つ。空気が澄んでいるせいもあるだろう。昨年は登山道の上に2カ所あった雪渓も、今年は手前の雪渓は消え、2つ目の雪渓だけは昨年の2/3程度の大きさで残っていた。昨年の影響だろうか？。ここではスコップを持った方が歩きやすくするため、雪を削られていて、滑らないように上り、下りの別々のコースに分けられていた。多くの観光客や下山したランナー達と声を掛け合いながら登って行く。「頑張って下さい」「ありがとうございます」の繰り返しだ。



雪渓を越えた辺りから、かなり苦しくなってきた。苦しいのは当たり前だが、今年の苦しさはちょっと違うように感じた。苦しさで周りを十分に見る余裕もなくなっていた。元気な人には抜かれるが、ほとんどのランナー達はいつもより苦しそうに思えた。もう何かあれば捕まりたい心境だ。前屈みになり、一步一步前進するが息もすぐに切れ、足も重たい。休んでは進みを繰り返す。「祓堂」の休憩用の腰掛けも一般登山者でいっぱいだった。その先には右に雪渓があり、雪解け水が登山道に刻まれた小さな溝を流れていた。手に触れると冷たい。この先はとりあえず息切れで苦しかったが、20歩進んでは休み、そんな感じで前進した。前のランナーも同じように苦しそうだ。目眩がするような感じだった。頭上に「一の越」にある「一の越山荘」が見えてきた。一の越への最後の登り、ヨチヨチ歩き状態だったが、一の越が迫ると元気が出て来た。両膝に手をつきながら、頑張って登る。しかし、そのスピードは大きな荷物を背負った一般登山客と変わらなかった。

ようやく標高2700mの『一の越』(62.9km/14:06)に到達。ここで水を頂き、スタッフにカメラを渡して、写真を撮ってもらった。ムーミンさんとM本さんの姿があった。今年、M本さんは一の越で応援して下さいだったのだ。いつ以来の再会だろうか。M本さんは小さな缶ビールを差し出して下さったので、ご厚意に甘えて頂く。M本さんに会えて、山頂へ登る元気がもらえた気がした。別のスタッフが「いなり寿司を食べませんか？」と勧めて下さったので1コ頂いた。エネルギーを摂取し、これで元気百倍、山頂を目指す。



トイレに行った後、気合いを入れて、最後の難関、瓦礫の中を這っての登山だ。ここからは岩場で石がゴロゴロしている。滑りやすいところも多い。時間帯的に降りる一般登山者も多く、前が支えて、立ち止まることがしばしばあった。息切れの苦しさは変わらず、以前と比べると休む回数がやたら多くなった。できるだけ大きな石や岩があるところが安定しているので、そこを進んでも途中で行き止まりのような感じになったり、砂や土が多いところはシューズを置いて踏ん張るだけで滑ることもあった。とりあえず滑らない様に気をつけて進む。ダブルさん、タラさん、うえちゃんが下山してきた。何だかんだ言われていてもやっぱり速い。「頑張って！」と応援をもらう。タラさんは尻を着きながら、滑り台のような体制で降りられていた。高所恐怖症の下り方だ。思わず笑ってしまった。下を見下ろすと一の越が綺麗に見え、今年はガスがほとんど掛かっていないので、ミクリガ池付近もはっきりと見えた。

距離感はわかっているようで、わからないのが最後の登山だ。誰かがここは「二の越」と言われていたのが、途中にあるやや平らなところ。それにしても10歩進んでは1回腰を下ろして休んだ。崖っぶり



ながら、右側を進んだ方が足場は良く、全体的にはスムーズに登り降りできそうなイメージだったが、端は足を滑らすと怖いので、今回は真ん中から登った。中間を過ぎて、頂上に近い部分が見えてきた。後ろから勢い良く抜いていくランナーもいれば、腰を下ろしてひと休み、ふた休みを繰り返すランナーの姿もあった。ウォークの方は距離が短くても、かなり苦しそうに登られていた。しかし、ここまで来ればマラニックもウォークもないと思う。みんな苦しくて当たり前だ。



登っては腰を下ろして休む、これを繰り返しているうちに頂上に近づいてきた。多くの下山者から「頑張ってください」と励ましの言葉を頂いた。普通のウルトラマラソンではあり得ないことだ。前が支えると登り辛くストレスになるので、避けようと人のいないところを登ると道筋が切れていたこともあった。なかなか登山は難しい。どちらかというとも右側を登った方が道筋は良く、そっちに行くべきだったと後悔する。この時間帯は登山者、下山者で混んでいた。もりけんさんが下山してこられた。今年もリタイヤされたようだ。休んだ後は少し楽になるが、苦しさは相変わらず。同じようなパターンで登って行き、上を眺める。まだ雄山山頂は見えない。時たま元気に追い抜いて行くランナーもいるが、概ねランナー達はバテバテ状態。ウォークに参加者の中には足が前に出ない人もいた。

そのうちにつかぬ間の一服ができる「三の越」の踊り場に着き、一休みする。本当にきつい中、休み休み進んでいるといつの間にか山頂は近くなっていた。右の崖付近には緑に映えた地を這う「這松」が生い茂っていた。下山中の多くの登山者、ランナーから「もう少し、頑張ってください」と励ましの言葉を掛けてもらう。苦しいが、あとひと踏ん張りだ。もう山小屋はしっかり見えていた。前にいたウォークに参加のカップルを抜かし、「もう少しですよ」と声を掛ける。このカップル、実はこの大会で出会ったことが縁で結婚されることになったと夜の完走パーティで報告された。立山が、雄山神社が縁というのも素晴らしいと思う。山小屋が目の前に迫ってきたので元気が出て、一気に駆け上がるとそこは「五の越」、前にゴールテープが見える。『雄山山頂』(63.5km/14:57)でゴールテープを切る。



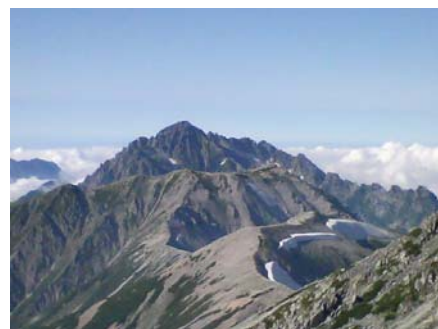
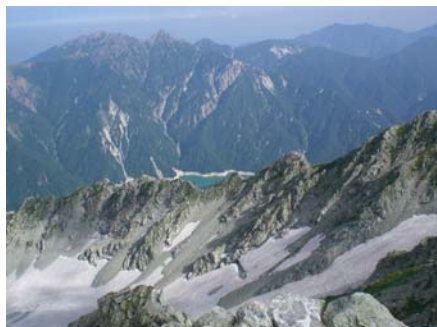
本当に苦しかった。今年の苦しさは違っていた。こんな筈ではと思いながら登っていた。体力の低下と思いたくない自分自身があった。しかし、低下は明らかだった。こんなことを思っていたら、後で聞いた話では天気が良過ぎて、気圧が通常より20%低かったらしい。これは厳しい筈だ。それでも2004年初参加の時のゴール時刻とほぼ同じ。辛さと時刻は関係ないのか？。フランケンさんが迎えて下さった。スタッフにゴールの写真を撮って頂く。山頂なので気温は15℃少しくらいだと思うが、陽差しが強く、体感温度は30℃弱くらいに感じた。温かいコーンスープを頂くと格別の味だ。山の上で飲むものは何故こんなにも美味しいのか。気圧の関係があるのかもしれない。

とりあえず、3003mの山頂にある「雄山神社峰本社」でご祈祷して頂かないといけないので、狭い岩場を登って行く。この大会で最も危険な場所はここだ。狭い社殿の前でご祈祷をして頂き、御神酒も頂く。隣には枸杞さん、フランケンさんの姿もあった。いつの間に枸杞さんは登られていたの

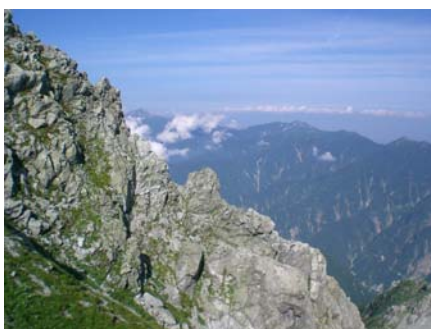
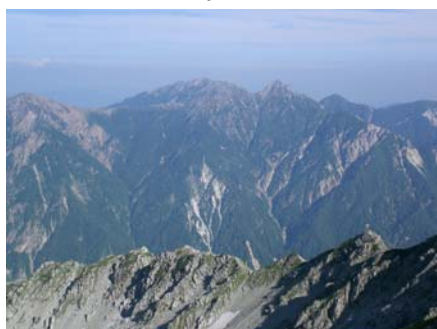


だろうか？。一般登山者も今年のご祈祷されている方が多いように思えた。3003mの碑の前で記念写真を撮ってもらう。

再び、ゴールの「五の越」に戻る。昨年9月頃にここから転落された方がいたとネットニュースで見たが、その話をされている方もあった。一步間違えば、恐ろしいところだ。H間さんはゴールされ、缶ビールを飲まれていた。まだ、やまさんが到着されていなかった。コーヒーとコーンスープを頂いて、やまさんのゴールを待つ。素晴らしい眺めだ。ガスがほとんどないので黒四ダム湖も少し見えている。その



向こうには赤沢岳や針ノ木岳などの後立山連峰の山々が牙を向いたように荒々しい山肌をさらけ出していた。言葉に言い表せない素晴らしい大パノラマだ。人間の小ささを感じる。岩の間からは小さな花が咲いていた。紫のりんどうが鮮やかで可憐だ。15時30分頃にやまさんがゴールされた。顔面蒼白で苦しうだった。開口一番「もう無理や。今年が最後！」と発せられた。しかし、その頑張りには頭が下がる。そして、視覚障害者のK村さんと伴走のI井さんも15時44分頃にゴールされた。テレビカメラがすぐにインタビュー。室堂からずっとテレビクルーが密着していたようで、今年の富山テレビの主演はK村さんかもしれない。



フランケンさんはK村さんの下山サポートをするとその場で待たれていた。やまさんと一緒に4時頃に下山を始める。もうやまさんの顔色は普段に戻っていた。下山時、登りのランナーも、一般登山者の姿もほとんどなく、わずかな下山者だけになっていた。前を進



んでいたランナーが怖々下山するのでストレスを感じるようになり、場所を変えて降りた。時々、シューズが滑り、尻餅を付く寸前のシーンもあった。何だかんだいっても下山は楽。登りはあんなに苦しかった息使いが嘘のようだ。ようやく「一の越」に戻れた。ここからはのんびり室堂に戻ろうと思っていたら、やまさんから枸杞さんの体調が悪いようだと言われてもらった。先ほどは元気に山頂でベンチに座られていたのに、何故なんだ？。

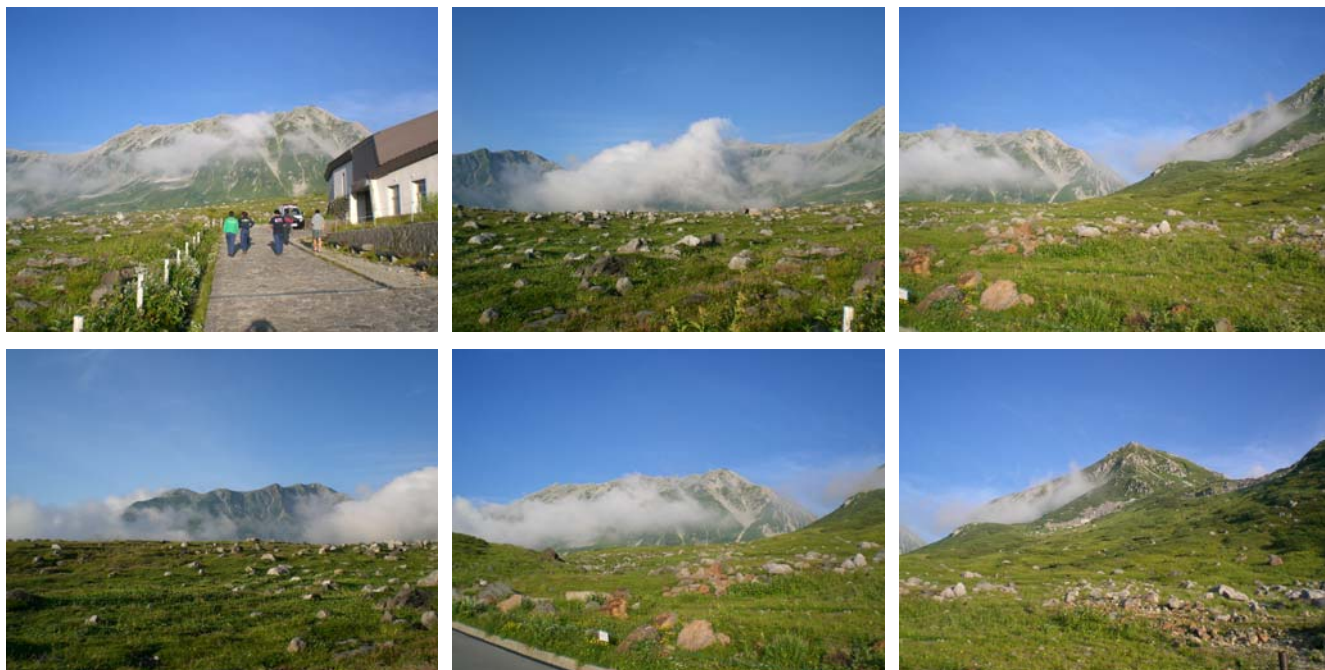
やまさんと枸杞さんの様子を見ながら下山しようとするが、何せ山は2人とも素人、どうして良いかわからない。立ち止まっては吐かれるが、固形物で苦しそうだ。水は底をついていたので、枸杞さんのザックにあったポカリスエットを飲んでもらう。過去にも時々、このようなことがあったらしい。高山病のようだ。「ザックを持ちますよ」と言っても枸杞さんは「大丈夫」と拒否されたが、私はザックを降ろしてもらい持った。その後もフラフラした状態で、何度も何度も吐きながら下山された。途中から、山頂でエイドされていたスタッフが降りて来られたので、一緒に室堂を目指す。登山道上の雪渓は階段状に削られていたので、難なく前進することができた。石畳から足を踏み外さないか心配で仕方なかったが、何とか室堂平まで進めた。バスで来られており、バスの最終が17時40分だったので間に合うか気になって仕方なかった。するとリタイヤされたN谷さんが手ぶらでK村さんの



様子を伺いに来られたので、枸杞さんを背負って立山センターの診療所まで運んで下さった。

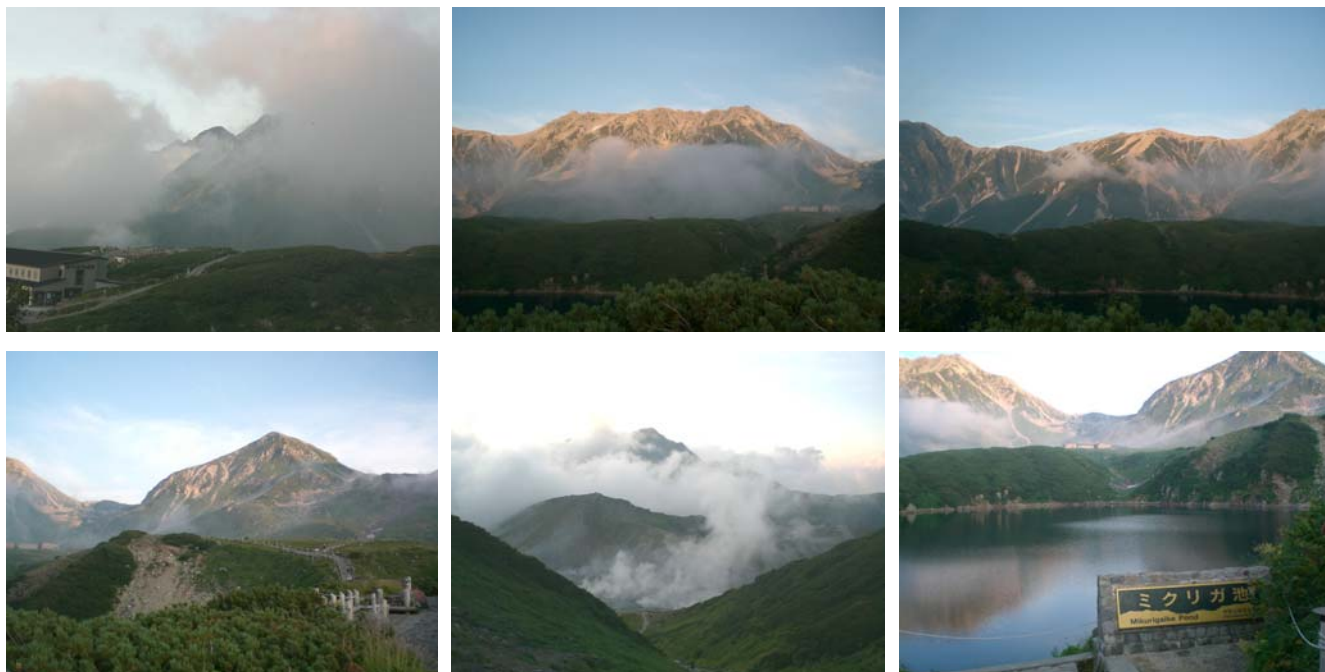
枸杞さんはベンチで横になられた。医師は「高山病なので、薬はない。標高の低いところに行けば

治る」とあつけなく言われた。室堂に富山テレビのスタッフの車が乗り入れられていたので、その車に乗せられて立山駅方面に向かわれた。これでひと安心だ。

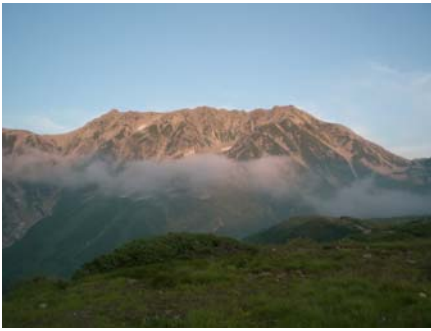


雷鳥荘にて

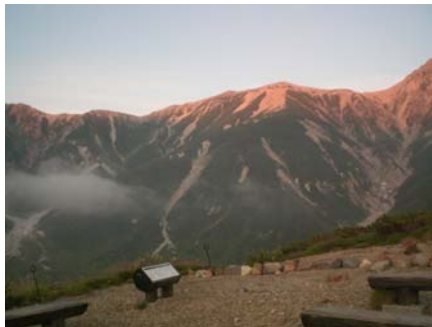
バスターミナルで荷物を探して、その後30分近く掛けて、荷物を持って「雷鳥荘」に向かう。距離は1.7kmだが、きついアップダウンがあるので時間が掛かる。6時過ぎの立山連峰は尾根側がやや赤く染まり、今までに見たことのない様相を呈していた。そして、やや低いところに少しだけガスが掛かり、過去に見た立山とは違った雄大さだった。雄山と龍王岳の間には丸い月も出て、一段と映えていた。「ミクリガ池」から望む雄山も鮮やかだ。夕暮れ時の空は山独特の言葉に表せない美しさを漂わせている。こん



な空を眺めていると人間は何て小さな存在か、下界が小さなものに見えて仕方なかった。途中で雪上車のような荷物を運ぶキャタピラの車が置いてあったが、何故こんなところにあるのか不思議に思っていた。実行委員長の松原さんに追いつくと日焼けされた足は真っ赤になられていた。ふと横にはN部さんの姿もあったが、その時は何も気付かなかった。



6時40分頃に雷鳥荘に到着。もうほとんどの方は夕食を終えていた。部屋は食堂に近い102号室だった。部屋に入るとN部さんが「ゴールはしたが気分が悪くなり、バスターミナルでずっと横になっていた。そこから雪上車があったところまで、実は雪上車で食堂から運んでもらった」と話されて驚いた。そんなにもダメージがあったのか。そして、何も食べられないのもう横になると言われた。N部さんをしてこの厳しさ。今年の立山は天気良過ぎて、気圧の下降も多くランナーに相当なダメージを与えたようだ。



着替えもせずにそのままゼッケン姿で食堂に行く。生ビール700円は高いが、山の上なので仕方ない。疲れた時は食べやすい物と食べにくい物とがあって、私はトンカツや魚は食べやすいようだ。しかし、味覚があまりなく、美味しいかどうかはよくわからなかった。この時、もりけんさんから「今年は天気良過ぎて、気圧が通常より20%低かった」と聞いた。だから、過去の大会より、息苦しかったことが解った。8時から完走パーティがあるので早く食べた。今年は男女相部屋だと聞き、タラさんとbabiさん、ダブルさん、やまさん、もりけんさん、そしてN部さんとが同部屋だった。どうして、タラさんとbabiさんと同室になったのか、事情を探る。山小屋のルールは男女の区別なしということでそうなったようだ。山小屋に入ればみんな同じランナー。ランナーは男女の区別なく、どちらかというみんなおっさんばかりだ。部屋に戻ってから、温泉へ。木の展望風呂で地獄谷の硫黄の臭いを嗅ぎながら、硫黄泉で疲れた身体を癒した。水道の水はスーパー銭湯の水風呂より冷たくて、アイシングも十分できた。

8時からの完走パーティに疲れの残るやまさんは不参加された。座れるように奥のテーブルに陣取る。ダブルさん、タラさん、もりけんさん、babiさん、ネイチャー組のうえちゃん、N原さん、T田さん、奈良のM岡さん、K村さん、I井さん、N谷さん、がつつくん、ぴかいちさんなどがひとつのテーブルに固まった。このテーブルには女子の2位から4位までが陣取っている豪華さだった。奥なので話が聞こえないため、前の方へ行くと10年連続参加者への記念品贈呈とひとりずつマイクを持って、10年を振り返られた。N原さん、フランケンさん、W井さんなどが10年組だ。今回、W井さんとはこの時初めて話げできた。今年のさくら道のことを聞くと先行する私は郡上八幡駅で追いつかれたが、W井さんは郡上





で止められたとのこと。いつも若々しくて、元気な方だ。その後、タラさんも交えての会話では昨年のそれぞれのさくら道でのロキソニンの話にまた辿り着いた。W井さんの心にいつまでも悪い印象として残るようなことをしたと思うと心が痛む。

雄山山頂手前で抜かしたカップ

ルの紹介があった。出会いの場所が立山登山マラニック、いつまでも思い出に残ることだろうし、毎年訪れることだろう。海外登山マラニック「ボルネオ島キナバルクライマソン」の抽選会が行われ、トップゴールの方ともう1名、補欠だろうか？N原さんが選ばれた。そうこうしているうちに完走パーティは幕を閉じた。その後、雲峰さんや仙台の方々のテーブルに行き、D口さん、K合さんなども交えて飲み直し、写真も撮る。再び元のテーブルに戻り、今度は日本酒。M本さん差し入れの「立山」はなめらかで甘くて、非常に美味しい酒だった。今までで一番美味しい酒に思えた。10時半を回ってから、部屋に戻ったと思う。早く眠りたかったが、今年は眠たくならず、その上に疲れもあって、なかなか眠れなかった。眠ったのは0時を回っていただろう。



翌朝の雷鳥荘、室堂

翌朝は4時40分に目が覚めたので、すぐに風呂に行く。スリッパがいっぱいだった。山の朝は早い、皆さん風呂に入って、早朝の山散策をしたいのだろう。展望風呂で薄暗い中でもはっきりと見える稜線を望む。風呂の湯加減はぬるくらいだった。5時にカメラを持って、雷鳥荘の外に出る。毎年同じ景色だが、その時その時で山は形を変えるので、瞬間、瞬間でしかその景色は見られないように思えた。山の空気は美味しく、このまま実社会から離れてこんな暮らしを1週間くらいはしてみたいと思う。昨日は慌ただしくゴールを目指したランナー達だが、その分の落ち着きを取り戻すかのように、みんなスローな動きになっている。



6時からバイキングの朝食を食べる。ランナー達の食欲は朝から旺盛だということを実感できた。大食いと思っている私の方がむしろ少なかった。帰り支度をして、7時に5人で「地獄谷」経由でバスターミ



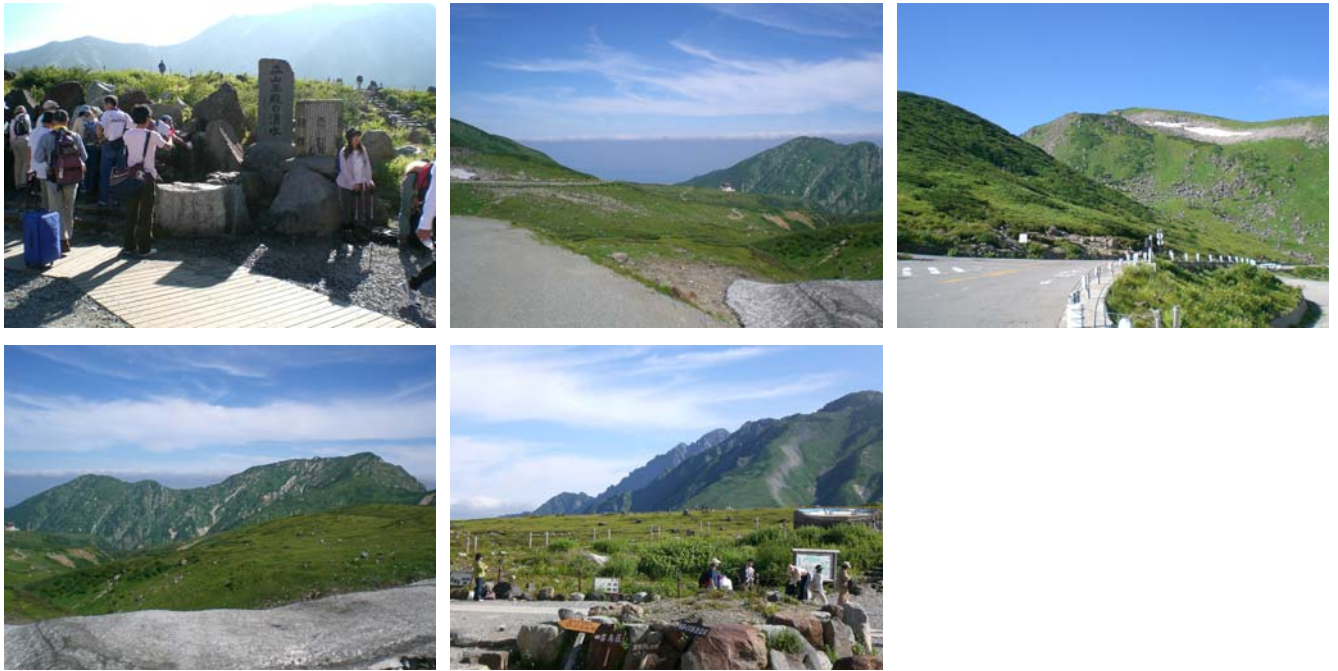
ナルに戻ることにした。地獄谷は6時から開放される。夜は危険なため、施錠されている。足元に気をつけて、滑らないように狭い石畳の登山道を降りて行く。荷物を持っている分、負担は大きい。あちこちから硫黄が吹き出していて、卵が腐ったような空気を漂わせていた。ここは源泉なので、温泉が流れているところもあった。2／3ほど来たところで写真を撮って欲しいと言われたので、撮らしてもらったが、後ろにある硫黄の柱の先から吹き出していた硫黄の煙に何人か咳き込まれ、私も咳き込んだ。凄い硫黄の力だ。そこから、左に曲がって長く急な階段を登らなければならない。ここがきついのだ。一の越の登りと同じくらいと思われる。ダブルさんでも休みたいと言われるほどの坂だ。何度か腰を降ろして休み、休みしながら、ようやくミクリガ池に到着。ここからはバスターミナルまでそんなに距離はない。登山者の方が「日本のアルプスみたい」と言われていたのが印象的だった。地獄谷周りだったので距離は2.4 km



あった。荷物を持って、結構歩いているのだ。

だらだら歩きながら、ホテル立山に着いたのは8時だった。まだ8時だというのに早起きしているので、昼のような気分だ。名水「立山玉殿の湧水」をボトルに入れて、バスの席を確保するためにバスターミナルに向かう。9時出発だが、すでに観光バスが数台待機していた。先ず富山駅直行バスの座席を確保、これでひと安心だ。その後、ホテル立山で土産を買って、出発を待つ。9時前にホテル立山前の室堂バスターミナルを出発、スタッフがいつも通り、大きな紙を掲げて見送って下さった。どう書いてあったか、思

い出せない。



室堂から帰路

9時前にバスは室堂バスターミナルを出発。車中から昨日歩いて上って来た立山有料道路を、そして雄大な立山連峰を見ながら、室堂に別れを告げた。帰りのバス車中から、コースを振り返った時に凄いコースだと実感する。称名滝が見えるポイントでバスは何十秒間か止まった。毎年のことだ。立山有料道路では弘法から先は帰路だけしか体験できない。その後は称名川、常願寺川の東側を進み、地鉄を左に見る形で富山駅に向かった。バスの経路でコースとなるのは称名川沿いの桂台から立山駅東側、常願寺川東側の立山大橋から小見の橋を渡ったところだけだ。雄山神社大宮前を通過し、その後は富山駅北口へ。例年より余裕があって、富山駅には11時前に着いた。北口には「富山ライトレール」という電車が止まっていた。O沢さんが来られていたので、握手をして別れる。もりけんさんは友人と会われるので、時間をずらされた。フランケンさんから枸杞さんが富山駅に向かわれていると聞いたが、電車時間の関係でお会いすることはできなかった。

ダブルさん、タラさん、やまさんの4人で11時11分のサンダーバードに乗り込む。babiさんはギリギリで間に合われた。違うバスだったようだ。富山名物「鱒寿司」は昨年、喉に通りにくかったので、今年は牛肉弁当と缶ビールを買った。車内の自由席はいっぱいでも子供連れも多く、泣いたりしてうるさかった。こんなに混んだサンダーバードは初めてだと思う。眠ったり、起きたりを繰り返す。外は暑そうだ。やまさんはいつも通り敦賀で降りられた。京都には14時09分に着き、ダブルさんとタラさんと別れ、15時に帰れた。

最後に

目に見えて年々衰える走力、対照的に異常な発汗量の増加という厳しさの中で不安を抱えながら挑んだ立山登山マラニックだったが、何とか昨年の雪辱を果たせて感無量だ。昨年は称名エイドでリタイヤし、ある面で良いところ取りできた感があった。しかし、一番厳しい八郎坂から、室堂までを2年振りに体験、その後の雄山山頂までは気圧が例年より低かったこともあり、あまりにも厳し過ぎると思えたが、ゴール後下山し、室堂平を一望した時、レースでの疲れが吹っ飛ばすように「今年も参加して良かった」という充実感を味わえた。やっぱり立山、室堂は最高だ。こんな大パノラマを見られることの幸せ、これは言葉では言い表せない。ここに自分の身を置いた時、如何に人間が小さな存在かがよくわかる。これは普段では絶対に経験できないことだ。きつい登山をして苦しんだ先に見える別世界。だから、山は良いといわれる由縁かもしれない。立山連峰に魅せられた素晴らしい3日間の立山登山マラニックはこうして幕を閉じた。来年も参加が許されるなら、絶対に参加したい大会だ。